

## メッセージアウトライン コリント人への手紙 第二8:1~15 「献金のすすめ」

[1-5]パウロは8章に入って、「さて兄弟たち」と呼びかけて新しい重要な話題を展開する。それは「献金」のことである。ペンテコステの日に聖霊が下ったことから始まったエルサレム教会は、その後、建てられたすべての教会の母教会ともいえる存在であった。しかしこの教会は経済的に非常に貧しかった。パウロはそのことを知り、他の異邦人教会に献金による援助を呼びかけていた。→ I コリント16:1~3  
しかしこの献金は単に金銭の支出さえすればよいというものではなく、そこには愛、交わり、信仰、献身といった多くの要素がかかわるものである。まずパウロはマケドニアの諸教会の模範について語る。その教会は具体的にはピリピ、テサロニケ、ベレヤ等の教会。

彼らの教会も最初の段階から激しい迫害と困難と極度の貧しさの中にあった。→使徒16~17章参照 そのような中であっても彼らの満ちあふれる喜びはあふれ出て惜しみなく施す富、すなわちエルサレム教会への献金となった。これは世の人々から見たら理解できないことであるが、これこそ神の恵みによって変えられた者の生き方であり、イエス・キリストのうちに見られるものであった。→ピリピ 2:4-11

しかも、彼らは自ら聖徒たちを支える恵みにあずかりたいと熱心に願い、限度以上にささげたのである。彼らは神のみこころに従って、まず自分自身を主にささげ、またパウロたちにもゆだねてくれた。ここに彼らの献身の姿を見る。つまり、献金をする前に、まず自分たち自身を主にささげ、使徒たちにささげることができていたのである。

[6-7]「テトスがすでにこの恵みのわざをあなたがたの間で始めていた」とは彼が以前コリントに派遣されていた時があり、その時に彼によってエルサレム教会援助の働きが始まったのであろう。パウロはそれを完了するように彼にすすめたと言う。これはマケドニアの諸教会の味わっていた恵みをコリント教会の人々にも是非味わってもらいたいという願いからであろう。7節で言われている「信仰」「ことば」

「知識」とは I コリント13章で教えられている聖霊の各種の賜物のこと。「あらゆる熱心」とは神のみこころにかなった生き方をするための熱心であろう。「私たちから出てあなたがたの間にある愛」とはパウロたちが神の愛によって彼らを愛したことから始まった愛のこと。愛はクリスチャンに与えられる徳の中で最高のもの。このようにコリント教会は様々な賜物において富んでいた。それゆえ、献金という恵みのわざにおいても富むようになってほしいとパウロはすすめるのである。

[8-9]献金は恵みのわざであるので命令されたり強制されてするものではない。むしろ愛の真実の表現として自発的に行われるもの。ただパウロはこのことに対するマケドニアの諸教会の熱心さを知らせることによってコリント教会の人々の愛の真実さを確かめようとしているのである。クリスチャンが献金をしなくてはならない最も大切な動機は神の御子イエス・キリストが人間のためにご自分を与え、ご自分を貧しくされたということにある。これはキリストの十字架の贖いの死にはつき

り現されている。

[10-15]パウロはここで個人的な意見を述べるが、それは彼らの益になることであった。彼らはこの献金について、昨年から、他に先んじて行っただけでなく、このことを他に先んじて願った人々であった。しかし、それが何かの理由でしばらく止まっていた。それでパウロは、「今、それをし遂げなさい。喜んでしようと思ったのですから、持っている物で、それをし遂げることができるはずです。…」とすすめるのである。持たない物までささげるということではなく、持っている程度に応じてささげれば、それを神は受け入れてくださる。パウロはエルサレム教会の人々には楽をさせ、コリント教会の人々には苦勞をさせようとしているのではなく、平等を図っていると言う。教会は、もし一つの部分が苦しめば、すべての部分がともに苦しみ、一つの部分が尊ばれれば、すべての部分がともに喜ぶものである。→Iコリント12:26 それゆえ、ある人たちが貧しく苦しんでいるのに、他の人たちがあり余ったままているのは神の教会にはふさわしいことではない。コリント教会を初め、異邦人の教会はすべての教会の母教会ともいべきエルサレム教会から福音を知らせてもらった。それゆえ、彼らが欠乏している今、物質的な物で彼らに奉仕すべきなのである。これは愛の交わりである。

15節の「多く集めた者も余るところがなく、少し集めた者も足りないところがなかった」は出エジプト記16:18からの引用。

このようにキリストにあって一つである教会はお互いにその欠乏を補い合うべきであり、教会どうしの具体的な助け合いは、キリストのからだである教会の一致と愛による交わりと奉仕の実を表す意味で重要なのである。

私たちも自分のことや自分の教会のことだけを考えるのではなく、目を大きく開き、信仰と愛と献身の思いをもって献金や奉仕に励むことが大切である。